恋人は友達の母と姉

ひと夏の秘密体験

芳川葵
挿絵／岬ゆきひろ

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

プロローグ……4
第一章　夏のプールは秘密の香り……12
第二章　初体験　熟女の濡れ肌は背徳の匂い……57
第三章　煌めく夜空を友姉と……117
第四章　納涼祭りと浴衣美女……165
第五章　禁断の温泉旅行　～友達の母と姉と～……212
エピローグ……282

登場人物 *Characters*

豊村 佐知恵
(とよむら さちえ)

優作の母親。着物が似合うしっとりとした色気漂う四十一歳の熟女。母性的な女性で斗真を息子のように可愛がる。

豊村 美織
(とよむら みおり)

優作の姉。美人ながら飾ったところがない気さくなお姉さん。初心な斗真をからかうなど、小悪魔的な面も。大学二年生で夏休みを利用して帰省している。

織崎 斗真
(おりさき とうま)

高校二年生の少年。夏休みを利用して幼なじみの優作の家に遊びに行く。

豊村 優作
(とよむら ゆうさく)

幼い頃から身体が弱く、療養のため田舎へ引っ越した。学校では美術部に所属。

「ありがとう。すぐに気持ちよく、楽にしてあげるからね」
蠱惑的笑みを浮かべた友姉は、股間から右手を離すと、結ばれていた水着の腰紐に両手をのばしてきた。水分を含んできつく結ばれていた紐が解かれていく。
（ああ、お姉さんに見られちゃう。まさか、美織ねぇに、優作のお姉さんに、こんなことしてもらえる日がくるなんて……）
初恋相手である美織の大胆な行動に、斗真の全身には驚きと興奮が駆け巡っていた。自然と喉が上下に大きく動いてしまう。生唾を飲む音が聞こえたのだろう。上目遣いに見つめてきた友姉が、クスッと魅惑の笑みを浮かべた。
（もしかして、がっついているように、見られちゃったのかな？）
顔面がカッと燃えるように熱くなる。羞恥に一瞬、気が散っていると、その間に腰紐を解き終えた美織が、締められていた腰布をグッと開くようにしてきた。そして次の瞬間、美しい女子大生の手によって、水着がずりさげられた。
下腹部に貼りつかんばかりの勢いでペニスが飛び出してくる。炎天下に晒された屹立。亀頭は、水ではない別の液体によっても光っていた。ネットリとした先走りを漏らす鈴口からは、ツンと鼻を衝く独特の精臭も立ちのぼっている。
「ああ、美織、お姉さん……」

「はぁン、すっごい。斗真くんのオチンチン、とっても大きいわ。それにとってもエッチな匂いをさせちゃって、いけない子ね」
それまで見たことがないほど、艶然とした笑みを浮かべた美織の右手が、すっと強張りにのばされてきた。太い血管を浮きあがらせている肉竿の中央付近を、やんわりと握りこんでくる。
「うはッ、あっ、あぁ、美織、ねぇっ」
「あんッ、握ってあげただけでピクッて、とっても敏感ね」
飾ったところのない気さくな友姉の表情はいま、大人の女としての色気で満ち、見つめているだけで射精感が迫りあがってきてしまいそうだ。
「だ、だって、僕、ほんとにこんなことされるの、初めて、だから、うぅぅ……」
水中で水着の上から撫でつけられたのとは、段違いの気持ちよさに、腰骨が蕩けてしまいそうだ。
「斗真くんのオチンチンが、悦(よろこ)んでくれて、嬉しいわ。あぁん、それにしても凄く硬くて、熱いわよ」
初心な態度が女子大生の淫心を刺激したのか、美織は艶めいた瞳で斗真を見上げながら、緩やかな手淫を見舞ってきた。

「あっ、あぅ、だ、ダメ、ですぅぅぅ」
脳天に突き抜けていく快感に、一瞬にして膝から力が抜けてしまった。腰が抜け、コンクリートの上にへたれこんでしまう。コンクリの上に直接お尻をつく格好であったが、火傷をしてしまうような熱さでないことに、ホッとする。
「ビックリした。ちょっと、大丈夫？」
斗真が急にくずおれてきたことに驚いた美織は、その瞬間に硬直から手を離してくれていた。乱れた呼吸を整えるようにしていた斗真の顔を、魅惑の微笑みを浮かべつつ覗きこんでくる。
「は、はい。なんとか」
「うふっ、ほんと、敏感で可愛い。でも、ダメよ、あまり大きな声を出しちゃ。誰か来たら、困るでしょう？」
「す、スミマセン」
「もう一回触るわよ、いい」
「はい、あっ、でも、あの……」
「んっ？　どうしたの？」
友姉の右手が、再び硬直にのばされてくる。指先が強張りに触れようとする寸前、

斗真は控えめな声を発してしまった。それに対して、美織はいったん手の動きを止め、こちらを見つめてきた。
「ぼ、僕も、美織ねぇに触りたいんですけど、ダメ、ですか？」
「えっ？」
「あっ、いや、なんでもないです。ごめんなさい」
（僕はなにを言ってるんだ。美織ねぇが触ってくれるだけでも幸運なのに、図々しいヤツって思われちゃったよ、きっと）
「どこに触りたいの？」
「えっ？」
女子大生の甘い囁きに、斗真はハッとした。恥ずかしげに伏せていた顔をあげ、友姉を見つめていく。すると、美織は蠱惑的な微笑みを顔に張りつけたまま、真っ直ぐに斗真を見つめてきていた。
「どこって、そ、それは……」
自然と視線がビキニトップに包まれた、釣り鐘状の膨らみにおりてしまう。揉み応え抜群の豊かな乳房である。しかし、視線は双乳だけに留まってはいなかった。自然とさらに下に向く。無駄な贅肉のない、驚くほど細く括れたウエスト。そして、ウエ

ストフリルのついた、ビキニショーツ。股間に貼りつく薄布の下に隠された、秘密の洞窟を想像すると、それだけで背筋がゾクッとしてしまう。
「下はダメ。でも、胸ならいいわよ」
「ほ、ほんとに？」
「ええ。さっきも触らせてあげたじゃない。ほら、触っていいのよ」
美人女子大生の右手で右手首を掴まれ、そのまま魅惑の膨らみへと導かれていく。柔らかくも張りのある左乳房の感触が、ムニュッと手の平いっぱいに伝わってきた。
「ああ、お姉さん」
水中で触らせてもらったときとは別次元の感触に、陶然とした呟きが自然と漏れてしまう。プールの中で触ったときは、味気なさのようなものを感じたのだが、いまは違う。パンッと内側から弾け出る張りに満ちているのに、思いのほか柔らかいのだ。指先に力をこめると、こめた分だけ確実に、若乳がひしゃげていく。
「あんッ、うぅん。あまり強くしちゃ、イヤよ。それと、両手で触ってもいいからね」
「はっ、はい、ありがとうございます」
上ずった声で返事をした斗真は、空いていた左手も右乳房にのばした。量感抜群の豊乳を恍惚とした表情で、揉みこんでいく。

すると、艶っぽい眼差しを浮かべた美織は、斗真に乳房を委ねたまま体勢を変えてきた。両手をコンクリートの地面につき、四つん這いの姿勢を取ったのだ。
「あっ、お、お姉さん」
友姉が四つん這いになったことにより、たわわな膨らみがぷるんと揺れながら、さらに量感を増して、手の平全体に心地いい重みを伝えてくる。思わず、手の平全体を上下に動かし、その張りに満ちた乳肉をポヨンポヨンと揺さぶってしまった。
「あん、もう、お姉さんのオッパイで遊ばないの。いけない子なんだから」
決して怒ってはいないことが分かる囁きとともに、甘く睨んできた美織に、自然と頬が緩んできてしまう。
(ああ、すっごい。美織ねぇ、ほんとにとんでもなくスタイルがいいんだ)
両手いっぱいに感じ取れる、豊かな膨らみの得も言われぬ柔らかさと弾力も素晴らしいが、陽光に輝くハニーブラウンのサラサラヘアの向こうに見える、シミひとつない雪肌の背中と、深く括れたウエスト。そして、無防備に後方に突き出されている、小ぶりながらもツンと上向きのヒップ。芸術品と言ってもいいほどの、悩ましく美しい曲線にウットリとしてしまった。
いきり立つペニスまでもが、ピクッと胴震いを起こし、ネットリとした先走り液を

さらに溢れ返してしまう。このまま友姉の豊乳の感触を味わっているだけでも、白濁液を噴きあげてしまいそうだ。
「み、美織ねぇ、僕、オッパイ、触らせてもらっているだけで、出ちゃいそうだよ」
「もうちょっと我慢して。そうしたら、私がもっと気持ちよくしてあげるから」
上目遣いに、そんな斗真の様子を見つめていた美織が、艶然とした微笑を送りつけてきた。地面についていた右手をあげ、頬に流れてきた艶髪を耳の後ろに梳きあげていく。なんとも色っぽい仕草に、斗真は思わず生唾を飲みこんでしまった。再びクスッと小さく笑った女子大生が、今度はふっくらと柔らかそうな朱唇をあえかに開き、天を衝く強張りに近づけてくる。
「えっ、あ、あの、お姉さ、ンッ！」
美織のまさかの行動を予想し、驚きの声をあげようとした直後、友姉の上半身がグッと沈みこみ、双乳の感触を楽しんでいた両手が、コンクリの地面にかすかに接触した。ほぼ同時に、ふっくらとした唇が亀頭先端と接触を持つ。その艶めかしい、初めての感触に、斗真の腰は盛大に跳ねあがってしまった。
「ンふっ、はぅッ。チュパッ、クチュッ、チュプ……」
「くはッ、うぅ、そ、そんな、美織、ねぇが、僕のを、く、口に……」

濡れた瞳で悩ましく見上げてきた美織が、躊躇いもなく亀頭を咥えこみ、そのまま肉竿に向かって顔を沈めこんでくる光景に、斗真は視線を釘づけにしていた。

（お姉さんの口に、本当に僕の硬くなったのが……。美織ねぇが僕に、ふぇ、フェラチオ、してくれているなんて……）

硬直が生温かな口腔粘膜に包みこまれ、根本付近が柔らかな朱唇で甘く締めつけられてきている。実際に目の当たりにしても、いまだに信じられない思いであった。

「はぁ、すっごい。ヌルヌルしたエッチな汁がいっぱい漏れてきちゃってるね」

「だっ、だって、美織ねぇのお口、気持ち、いいんだもん」

「うふっ、だったらもっといっぱい気持ちよくしてあげるね。ちゅぽっ、ふぅン……」

「はぅ、くっ、おぉ。み、美おり、ねぇ……」

「チュプッ、ちゅぱっ、ンふぅ、ぢゅちゅ……」

再び咥えこまれたペニス。いきり立つ強張りからの感触は鋭敏なのに、そのほかの感覚器官がすべてオフになってしまったような、初めての快感が襲いかかってくる。腰が浮きあがり、まるで宙を漂っているような思いに囚われてしまう。

せっかくの豊乳の感触を楽しむ余裕もなく、いまや両手の甲は完全にコンクリの地面についた状態である。美織が首を上下させるのに合わせて、弾力豊かな膨らみが弾

むように手の平に押し当たってきているだけだ。
「ああ、すっごい。口でしてもらうのが、こんなに、くッ、気持ちいいなッ、くほぅ、ダメ、です、そんな舌でなんて、あっ、あぁ……」
美織が首を動かすたびに、柔らかな朱唇によって肉竿が甘くこすりあげられていた。それだけでも、たまらない快感であったのだが、美しい友姉はさらにヌメッとした舌先で張り詰めた亀頭を嬲ってきたのだ。
先走り液を滲み出させている鈴口を震わせた舌先でくすぐられると、眼窩に煌びやかな悦楽の火花が散り、煮えたぎったマグマが輸精管を駆けあがってきそうになる。奥歯を噛み締め、尻穴を窄め、なんとか射精衝動をやりすごしていく。
「うふっ、はンッ、いいんだよ、我慢しないで出して。お姉さんのお口で全部、受け止めてあげる」
斗真の初心な反応が女子大生の淫心をくすぐるらしく、美織は悩ましくも優しい微笑みを浮かべて再度硬直を解放すると、艶めいた瞳を細めて見上げてきた。その視線の淫靡さに、ゾクッと背筋が震えてしまう。
「うふっ、はぅッ、チュッ、グチュッ、ちゅちゅ」
陶然と見つめる斗真に艶然と微笑み、口唇愛撫を再開した友姉は、尖らせた舌先を

鈴口から亀頭裏の窪みに這わせ、小刻みな刺激を送りこんできた。鋭く突きあがってきた快感に、視界が一瞬、白く塗りこめられそうになる。

「おお、お姉さん、ミ、おり、ねぇ……」

腰を切なそうにくねらせ、斗真が快感のうめきをあげる。バウンドするように手の平に当たってきていたビキニ越しの双乳を、思わずグッと鷲掴(わしづか)みにしてしまう。

「ンっ、はぅ、ぅん、むぅ、チュプッ、クチュッ」

直後、美織が悩ましいうめきをあげた。朱唇がキュッと締まり、それまで優しく嬲ってきていた舌が、ヂュッと強く押しつけられてきた。

「ぐふッ、あぅ、あぁ……」

それまでにない、目も眩むような刺激に斗真の腰が自然に突きあがってしまう。天を仰ぎ、吸いこまれそうな青空を見つめつつ、辛うじて射精を思い留まる。しかし、視線を戻した瞬間、あることに気づいた。無防備に後方に突き出されていた友姉のヒップが、艶めかしく左右に揺れていたのだ。

(もしかして、僕のをフェラチオしながら、お姉さんも変な気分になっちゃったりして……。あぁ、美織ねぇがあそこを濡らしてたら、僕はそれだけで……)

初恋相手の女子大生が、口唇愛撫をしつつ淫唇を濡らしている場面を妄想すると、

またしても腰が震え、口腔内のペニスがビクンッと胴震いを起こしてしまう。
「むぐっ、ぢゅぷっ、ヂュッ、んぅ、クチュッ……」
悩ましく左右に揺れ動くヒップを見つめつつ、妄想に浸っている間に、美織は態勢を立て直していた。再び優しく朱唇で肉竿をこすりつつ、舌先で敏感な亀頭を重点的に嬲ってくる。
鈴口をチロチロと掃いたかと思うと、必死に笠を広げるカリ首の周囲をグルンと舐めあげ、亀頭裏の窪みをくすぐってくるのだ。
限界を超えた射精感を抱える童貞の斗真に、耐えられる気持ちよさではなかった。亀頭裏から再び鈴口に舌先が押し当てられた瞬間、それはやって来た。
「ああ、ダメ、おっ、お姉さん、僕、出ちゃいます。あっ、出ッるぅぅぅッ！」
睾丸がキュンッと迫りあがり、沸騰したマグマが一気に駆けあがってくる。張り詰めた亀頭がさらなる膨張を遂げ、友姉の口腔内に欲望のエキスを解き放ってしまう。
ドピュッ、どくっ、ズビュッ、ドピュピュ……。
「ンぐっ、んぅ、ふぅん、コクッ、チュッ、チュちゅぅぅぅ……」
美織の眉間に悩ましい皺が寄った。苦しげなうめきを漏らしつつも、決してペニスを解放することはなく、断続的に噴きあげる白濁液を、喉の奥に流しこんでくれてい

る。さらには、輸精管の残滓を吸い出すような、吸引も加えてきてくれた。
（嘘みたいだ。美織ねぇの口に、僕の精液が……。ああ、飲んでるよ。綺麗なお姉さんが、僕のザーメン、飲んでくれてる）
「ああ、美織ねぇ、ごめんなさい。でも、僕、あっ、あぁぁ……」
美織の口腔内に精を放ち、それをまた嚥下してくれている光景が、斗真の射精を助長していった。断続的に脈動が起こり、濃厚な白濁液を女子大生の喉奥に向かって放ちつづける。優に十回を超える吐精ののち、ようやくペニスはおとなしくなった。
「ンぐっ、チュッ、ちゅぅぅぅッ、コクン……チュポン。はぁ、あぁ、すっごく濃いのが、いっぱい、出たね。気持ちよかった？」
最後にさらなる吸引を加え、ペニスを解放してきた美織は、四つん這い姿勢から斗真と向き合う体勢となると、艶めいた瞳で真っ直ぐに見つめてきた。
「はい、もう、さ、最高でした。ありがとうございます」
初めて見る友姉の色っぽさに恍惚となりつつ、斗真は美人女子大生を見つめ返していくのであった。

圧倒的な充実感に、佐知恵は一瞬、呼吸が止まってしまうかと思ったほどだ。逞しい少年の肉鑓で、淫洞はピッチリと塞がれてしまっている。

「うくッ、うぉぉ、気持ちいい。佐知恵さんのオマ〇コ、優しく包みこまれているのに、エッチな襞ヒダが絡みついてきて、くッ、すぐにでも、出ちゃいそうだぁぁ」

「いいのよ、出して。この前みたいに、おばさんの膣中に、うぅン、白いのいっぱい、出してくれていいのよ」

斗真の陶然としたうめきに、佐知恵は艶めかしく眉根を寄せながら、頷きかけていった。大量の白濁液が、子宮に襲いかかってくる感触を思い返すと、それだけでゾクッと背筋が震えてしまう。

「いいんですね。膣中に、オマ〇コの奥に、出していいんですね」

「ええ、いいわ、来て。おばさんの子宮に、斗真くんの濃厚な精液、いっぱい飲ませてちょうだい」

「ああ、佐知恵さん……」

恍惚の表情を浮かべた少年が、ゆっくりと腰を前後に動かしはじめた。チュクッ、グチュッと粘ついた淫音が、瞬く間に鼓膜を震わせてくる。

パンパンに張り詰めた亀頭が、熟襞をこそげ取るように上下に動くと、それだけで

佐知恵の脳天には、たまらない愉悦が駆けのぼっていく。
「はンッ、ぅん、いいわ。素敵よ、斗真、くン。もっと激しく、おばさんの膣中をズポズポしてちょうだい。そして最後には、コッテリしたミルクをいっぱい、注ぎこんでぇぇぇ」
（はぁン、私ったら、自分から積極的に膣内射精をせがむなんて……。でも、この感覚、たまらなく気持ちいいわ。どうしてこんなに気持ちのいいこと、忘れちゃってたのかしら）
セックスをしなくて当然の夫婦生活。数年ぶりにそれを打ち破ってきた、斗真の若く逞しいペニス。それによって佐知恵は、自分がまだまだ現役の「おんな」であることを、はっきりと自覚するのであった。
左脚を斗真に抱えあげられた体勢の不安定さに、佐知恵は快感に震えながら、抱きつくように両手を少年の首の後ろで組んでいった。
「はぅ、あぁ、佐知恵さん、僕、もうすぐ、ほんとにぃぃぃ……」
少年の声にも切迫感が滲み出していたが、牡の本能がそうさせるのか、腰は片時も止まることなく熟襞をこそげ取る動きをつづけていた。それどころか、佐知恵の訴えに応えるように、律動が一層激しくなってきている。

ぶちゅっ、グチョッ、にゅぢゅ……。淫猥な摩擦音とともに、生々しい性交臭が立ちのぼり、その芳香が鼻腔粘膜をくすぐると、熟女の性感がさらに煽り立てられた。

「あんッ、いいん、素敵よ、斗真くん。いいのよ、来て。我慢なんかしないで、おばさんのオマ〇コに、いっぱい射精してちょうだい」

斗真のペニスが肉洞内を往復するたびに、熟女の脳天には鋭い愉悦が突き抜けていった。張り出したカリによって、ゴリ、ゴリッと柔襞が抉られる。その直接的な快感に、目の前が白く塗りこめられてきそうだ。

「ああ、佐知恵さん、佐知、えッ」

まるで別の意志に支配されているように、腰を激しく前後に動かし、逞しい肉鑓を肉洞に送りこみながら、斗真の左手が浴衣の上から右乳房に重ねられてきた。浴衣地ごと、ノーブラの熟れた膨らみを捏ねあげられてくる。

「あぅん、ダメよ、斗真くん、そんなふうに、オッパイ、揉まないで」

膣襞から伝わる、ダイレクトで強い刺激とは異なる、柔肉からのゆったりとしていながら、確実に快楽中枢をくすぐってくる愉悦に、腰骨がブルッと震えてしまう。蜜壺にもその悦びは伝わり、自然と淫洞全体が締まっていった。

「うはッ！　締めつけが、強く、なったぁぁぁあ。くぅぅ、気持ちいい。佐知恵さん

は、オマ〇コもオッパイも、どっちも優しい感じがして、とっても、気持ちいいよ。はぁ……生で、直接、佐知恵さんのオッパイが揉みたい」
「あぁン、待って。乱暴にしないで。おばさんが、ポロンさせてあげるから」
斗真が左手で強引に襟元を開こうとしてきたのを制すると、両手を襟元に這わせ、グイッと左右に大きく寛げていった。熟した豊乳が、たわむように姿をあらわす。
「ああ、佐知恵さんの大きくて柔らかいオッパイだ」
陶然とした声をあげ、斗真の左手が露わになった右の豊乳に被せられてきた。量感と柔らかさを堪能するように、下から捏ねあげてくる。
「あんッ、いいわ。オッパイも斗真くんのオチンチンも、最高に気持ちいい」
(あぁん、ダメよ、言っちゃ。息子の友達の、高校生のオチンチンで、こんなに感じさせられちゃってるなんて、言ってはダメ。もし言っちゃったら、戻れなくなる)
快感で白く塗りこめられていく中、最後まで残っていた理性の一片がその言葉を思い留まらせようとしていた。だが、肉洞と乳房を発端とする、ジンジンと痺れるように拡がっていく悦楽に、最後の理性も飲みこまれてしまった。
「あぅん、とっても硬くて、熱くて、おばさんもいっぱい、感じちゃうのぅ」
その言葉を発した直後、脳がカッと熱くなり、柔襞が激しく震えた。肉洞を押し広

げてくる硬直を、それまで以上に締めあげていく。熟女の本気の蠕動が起こったのだ。
「ぐはぅ、うッそぅ……。さらに、強く、なる、なんてぇえぇ。あぁ、すっごい。佐知恵さんのエッチは襞ヒダで、僕のが、くぅッ、絞られてるぅぅぅ」
斗真が大きく目を剥いた。ペニスを根本まで穿ちこんだところで、腰の動きが急に止まり、左脚を抱えあげている右手の指が、むっちりとした腿肌に食いこんでくる。さらに、乳房に被せられていた左手も、生の柔肉を鷲掴みにしてきた。
「ダメよ、オッパイ、そんなに痛く、しないで。うぅン、すっごい、斗真くんのが、さらに硬く、大きくなったのが分かる。出そうなのね？　もう、出ちゃいそうなのね？」
熟乳が押し潰される感触に、悩ましく眉根を寄せた佐知恵だが、直後、蜜壺を塞ぐ硬直が胴震いとともにさらなる膨張を遂げると、淫靡に濡れた瞳で斗真の顔を見つめていった。真っ赤に紅潮していた少年の顔は、額に汗が浮かび、いまや蕩けんばかりの表情となっている。
「はぃ、僕、もう、くぅぅ、ダメ、です。ほんとにこのまま、出して、いいんですか？」
「いいわ、来て。おばさんの子宮に、斗真くんをいっぱいちょうだい」
「ああ、佐知恵さん」
佐知恵の言葉に、斗真の全身に震えが走ったのが分かる。しかし、それによって最

後の気力を奮い立たせたのか、汗ばんだ右手が熟ももを抱え直し、左手は再びヤワやわと熟れた膨らみを捏ねあげはじめる。そして腰も、ラストスパートと言わんばかりに、激しく振られはじめた。

ンヂュッ、ぐちょっ、にゅぢゅ……。粘ついた蜜音が高々に鳴りはじめ、激しい突きこみに、熟女の双臀が木の幹に当たってバウンドする。

「あっ、あんッ、ぅン、すっごいわ、斗真くん、おばさんも、イッちゃいそうよ」

右脚一本で立っている不安定さが増し、再び斗真の首にまわした両手に力が加わっていく。ほとんど少年にしがみつくような格好で、絶頂の近さを告白していた。

「一緒に、一緒にイッてください。ああ、僕、出るッ。くッ、あぁ、出ちゃう、佐知恵さんの気持ちいいオマ〇コで、イッちゃぅぅ〜〜〜ぅッ！」

ズンッと一際激しい突きこみを見舞ってきた直後、パンパンに膨張していた亀頭が一段と膨らみ、刹那、鈴口がクパッと開き、大量の白濁液が佐知恵の子宮めがけて押し寄せてきた。

ズピュッ、どくっ、ドピュン、ぢゅぴゅぴゅ……。

「あんッ、すっ、凄い。来てる、斗真くんの熱い精液が、いや、イクッ、おばさんも、あっ、あぁん、イッぐぅぅ〜〜〜〜ンッ！」

最後の突きこみで眼窩に鋭い火花が散っていたところに、煮えたぎった欲望のエキスを叩きつけられ、そのマグマの奔流に一気にのぼり詰めてしまった。

屋外であることは忘れ、絶頂の喘ぎが大きく口をついてしまう。天を仰ぐように首がのけぞる。生い茂る木々の葉の隙間から、星々の煌めきが朧(おぼろ)に見えていた。

蜜壺全体に絶頂痙攣が襲いかかり、断続的に射精の脈動を繰り返す強張りをキュッ、キュゥッと強弱をつけ、締めあげていく。

「うほぅッ、あぅ、おぉ、そんな、激しく締めあげられたら僕、全然、止まらないよぅぅぅ」

ビクン、ビクンッと小刻みに腰を震わせながら、斗真が恍惚の表情で訴えかけてきた。その間にも、迸り出た白濁液は確実に熟女の子宮に打ちつけられてきている。

「いいのよ、出して。おばさんの膣中に、最後の一滴まで、搾り出してちょうだい」

「ああ、佐知恵、さっ、ン……」

十回以上の吐精の末、斗真は右手で佐知恵の左脚を抱えあげたまま、グッタリと身体を預けるようにしてきた。膣襞や子宮を襲った熱い精液の激流に押しあげられていた熟女は、太い木の幹に背中を預ける形で、少年を抱き留めていった。

「はぁン、とっても素敵だったわ、斗真くん」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

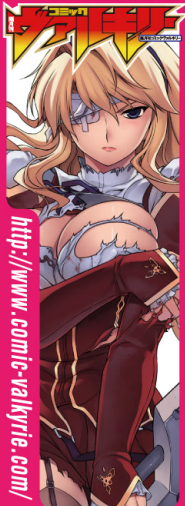
※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！